『言語学大辞典セレクション』「ヨーロッパの言語」三省堂 1998

エストニア語 eesti keel, 英 Estonian, 独 Estnisch, 仏 estonien, 露 эстонский язык

ウラル語族，フィン・ウゴル語派，バルト・フィン諸語に属する言語で，話者の数は，100万人を超える．ソビエト連邦を構成する15の共和国の1つ，エストニア共和国の人口157万人のうちの61.5%(96万3千人)が，エストニア語を母語としており（1989），同共和国では，ロシア語と並んで公用語に相当する地位を与えられている．エストニア語の話者は，このほか，ソ連の他の共和国（6万4千人）や，スウェーデン（1万5千人），カナダ（1万4千人），アメリカ合衆国（2万人），オーストラリア（5千人）などにも住んでいる．

[音と文字] エストニア語は，ラテン文字を用いて表記される．用いられる文字は，

a, b, d, e, f, g, h, i, j, k, l, m, n, o, p, r, s, š, z, ž, t, u, v, õ, ä, ö, ü

の27文字である．

母音は，i, e, a [ɑ], ä [a], o, ö [øт], õ [ə-], u, ü [y] の9つである．第1音節(ふつう主強勢がある)には9つの母音すべてが現われるが，第2音節以降には，比較的新しい外来語を除いて，a, e, i, u の4母音しか現われない．同様の制限は，二重母音についてもあり，数多い二重母音のうち，エストニア語固有の語の第2音節以降に現われるのは，ai, ei, ui のみである．母音には，短，長，超長（short／long／

overlong, lühike／pikk／ülipikk）の3段階（二重母音の場合は，長，超長の2段階）の区別がある．正書法では，長母音と超長母音の区別をせず，短母音を母音文字1つ（a, e, i 等）で表わし，長母音と超長母音はともに母音文字2つ（aa, ee, ii 等）で表わして，2段階の区別をしているのみである．たとえば，

kalu : kaalu [ka:lu] : kaalu [ka::lu]（kala「魚」の複数分格；kaal「重さ」の単数属格；kaal の単数分格）

以下，区別が心要な場合には，超長音として発音される母音（二重母音）を表わす文字の直前に符号（ˋ）をつけて，超長音を示す（k'aalu, s'auna）.

子音音素は，/p, t, t'(=ʈ), k, s, s'(=ʂ), h, v, j, l, l'(=ɭ), r, m, n, n'(=ɳ), ŋ/ が固有のものであるが，外来語には，/f, š(=ʃ), z, ž(=ʒ)/ も現われる．口蓋化した子音 /t', s', l', n'/ は，/t, s, l, n/ と正書法上，区別がない．たとえば，

kott—/kot:/「木靴」，/kot':/「袋」

toss—/tos:/「湯気」，/tos':/「とんま」

hall—/hal:/「霜」，/hal':/「灰色の」

kann—/kan:/「水差し」，/kan':/「おもちゃ」

閉鎖音 /p, t, t', k/ は無気音で，短音はわずかながら有声化して発音され（ウラル言語学の音声表記では [B, D, D', G] で表わす），文字として b, d, g が用いられる．たとえば，

habe [haBe]「ひげ」，sada [saDa]「100」，paadi [pa:D'i]「ボート（paat）の」，siga [siGa]「豚」

/ŋ/ は /k/ の直前のみに現われ，n で表記される．たとえば，king [kiŋ:G]「靴」，kink [kiŋk:]「丘」．語頭の /h/ を発音しない話者もいる（hobune [(h)oBune]「馬」）.

母音と同様に，ほとんどの子音に，短，長，超長の3段階の区別があるが，正書法上は，/p, t, t', k/ の場合（b～p～pp；d～t～tt；g～k～kk）を除いて，短音（1文字）と長音・超長音（2文字）の区別をするのみである．たとえば，

habe /hape/ : hape /hap:e/ : happe /hap::e/（ひげ；hape「酸」の単数主格；同単数属格）

lina /lina/ : linna /lin:a/ : linna /lin::a/（テーブルクロス；linn「町」の単数属格；同単数分格）

以下，長音と超長音の区別が必要な場合には，超長音として発音される子音を表わす文字の直前に，母音の場合とおなじく符号（ˋ）をつけて超長音を示す（ko'tt, ki'ng, kin'k, ha'ppe, li'nna）.

語の強勢には，主強勢（pearõhk），副強勢（kaasrõhk），無強勢の3つのレベルがある．主強勢は，ふつう第1音節におかれ（vána, vánaneb），多音節語では，副強勢が第3音節（または第4音節）におかれる（élamìne, májanduslìkku）．外来語の場合には，主強勢が第1音節以外におかれることもある（poéetilìne, fìlolóogia）.

エストニア語の韻律で，語強勢と並んで重要な概念は，「語の長さ（sõnavälde, 英 word quantity）」である．語の長さは，ふつう，第1音節（主強勢のある音節）の長さによってきまる．第1音節が短い（開音節，短母音）ならば，その語（語形）は「短い」（長さI）という（kala, kalaga, kaladele）．それ以外の場合，もし，その語（語形）が超長音を含んでいれば，その長さは「超長」（長さIII）であり（m'aa, m'aad, m'aasse; ko'tt, ko'tta, ko'ttade, ko'ttadega），そうでなければ，単に「長い」（長さII）という（katus, katuse, katustega）.

[語形変化および語の構造]　エストニア語では，名詞（形容詞，代名詞，数詞を含む）と動詞が，語形変化をする．語形変化をする語は，階程交替の有無によって，2つのクラスに分けられる．階程交替のないクラスでは，語形変化はもっぱら接尾辞の付加によって行なわれる．階程交替のあるクラスでは，階程交替も語形変化の手段として用いられる．

階程交替（astmevaheldus, 英 gradation）とは，語幹の形のパラディグマティックな交替で，量的交替（vältevaheldus, 英 quantity alternation）と質的交替（laadivaheldus, 英 quality alternation）とに分けられる（表1参照）.

表1の，それぞれの交替のタイプにおいて，左側の音の組み合わせを強階程（tugev aste, 英 strong grade），右側を弱階程（nõrk aste, 英 weak grade）とよぶ．量的交替は，語の長さの長さIII（強階程）と長さII（弱階程）との間の交替として特徴づけられる．たとえば，l'aev : laeva（「船」の単数主格；単数属格），kim'p : kimbu（「束」の単数主格；単数属格）において，l'aev と kim'p は強階程で長さIII，laeva と kimbu は弱階程で長さIIである．これに対し，質的交替は，閉鎖音 /p, t, t', k/ の短音が他の子音と交替したり消失したりする現象として特徴づけられ，語の長さの変化とは無関係である．たとえば，tuba : t'oa（「家」の単数主格；単数属格）において，tuba は，強階程で長さI，t'oa は弱階程で長さIIである．階程交替をする語のパラダイムの，どの位置に強階程が現われ，どの位置に弱階程が現われるかは，語形変化のタイプによってきまる．たとえば，se'pp「かじ屋」を例にとれば，単数形では，強階程が主格 se'pp と分格 se'ppa のみで，その他の格形ではすべて弱階程の語幹 sepa- が用いられ，複数形では，主格 sepad が弱階程である以外はすべて強階程である．同じパラダイムに属する2つの語形が，階程の違いのみによっ

て区別されることも多い．たとえば，

se'ppa : sepa (「かじ屋」の単数分格；単数属格)，

ri'kkas : rikas (「富裕な」の単数内格；単数主格)，

mõ'tte : mõte (「考え」の単数属格；単数主格)

名詞は，数（単数，複数）と格（14格）によって語形変化する（表2参照）．格語尾は，大部分の格の場合，単数と複数で共通である．単数属格には，語尾がなく，語幹(単数語幹)がそのまま単数属格として用いられる．単数主格は，属格と同じ形であることも多い (kõne — kõne「話」，ohutu — ohutu「安全な」，kõ'rge — kõ'rge「高い」) が，異なる形である方が一般的である (tore — toreda「すばらしい」，teine — teise「第2の」，ilus — ilusa「美しい」，mõte — mõ'tte「考え」，aken — a'kna「窓」，kim'p — kimbu「束」)．単数分格は，ときに属格と同じ形のことがあり，このタイプの語では，単数の主格，属格，分格が同じ形になる (saba — saba — saba「尾」，kala — kala — kala「魚」)．

この3つ以外の単数の格形はすべて，「単数語幹(＝単数属格形)＋格語尾」という構造になる．

複数形のうち，主格は，すべての名詞を通じて，「単数語幹＋-d」という構造をしているが，属格と分格の場合には簡単な規則がない．たとえば，複数属格，複数分格の順に，

kõne-de, kõne-sid「話」; toreda-te, toreda-id「すばらしい」; teis-te, teis-i「第2の」; aken-de, a'kna-id「窓」

この3つ以外の複数の格形は，すべて「複数語幹＋格語尾」という構造をしている．複数属格形がそのまま複数語幹になる (kõnede-, toredate-, teiste-, akende-) のは，すべての名詞に共通であり，この語幹からつくられる複数の格形を「de 複数 (*de*-mitmus)」とよぶ．一部の名詞に限って複数語幹がもう1つあることがあり，この場合の語幹は複数分格からえられ，この複数形を「i 複数 (*i*-mitmus)」とよぶ．たとえば，tore「すばらしい」には，de 複数の toredate- (複数属格 toredate) と i 複数の toredai- (複数分格 toredaid) の2つの複数語幹があり，たとえば，複数入格には toredatesse, toredaisse の2つの形がある．ただし，到格，様格，欠格，共格では，ふつう de- 複数の形しか用いられない．

14の格のうち，入格，内格，出格，向格，接格，奪格の6つは，場所を表わす格として，「内部—表面・近傍」と「到着点—静止位置—起点」の2つの基準により，表3のような意味的体系をなしている．

名詞を修飾する形容詞は，数，格のうえで，名詞と一致する (ilus tüdruk : ilusa-le tüdruku-le : ilusa-te-le tüdruku-te-le,「美しい少女」の単数主格；単数向格；複数向格)．ただし，到格，様格，欠格，共格の場合，格語尾は主名詞のみに付加され，形容詞は語幹の形（＝単数属格形または複数属格形）になる (ilusa tüdruku-ga : ilusa-te tüdruku-te-ga,「美しい少女」の単数共格；複数共格)．形容詞の比較級は，語幹に接尾辞 -m を付加してつくる (ilus : ilusa-m,「美しい」の原級；比較級)．最上級は，副詞 kõige「すべてのうちで」と比較級によってつくられる (kõige ilusa-m,「美しい」の最上級)．ただし，一部の形容詞の場合，「語幹＋-im」という最上級形も可能である (ilusa-im ＝ kõige ilusa-m)．

「数詞＋名詞」の構造では，名詞は単数形で現われる．1 (üks) 以外の数詞が主格のとき，名詞が分格となる点を除けば，数詞と名詞は格において一致する．たとえば，

ko'lm 'aasta-t「3年 ('aasta-t は 'aasta「年」の分格)」: kolme 'aasta (属格) : ko'lme 'aasta-t (分格) : kolme-st 'aasta-st (出格) : kolme-l 'aasta-l (接格)

人称代名詞には，3つの人称と単数，複数の区別があるが，性の区別はない．人称代名詞には，長形と短形がある（1人称単数 mina, ma; 複数 meie, me; 2人称単数 sina, sa; 複数 teie, te; 3人称単数 tema, ta; 複数 nemad, nad)．指示代名詞は，see (複数 need)「これ」と too (複数 nood)「あれ」の2項対立をなす．疑問代名詞には，人および高等動物をさす kes とそれ以外をさす mis がある．

動詞は，人称と時制，法に従って，語形変化をする．動詞の人称形には，単数，複数の1人称，2人称，3人称の6つのほかに，「不定人称 (umbisikuline, 英 impersonal — いわゆる「受動形」)」とよばれる特別の形がある．

時制は，現在 (olevik)，過去 (lihtminevik)，現在完了 (täisminevik)，過去完了 (enneminevik) が区別され，法には，直説法 (kindel kõneviis)，条件法 (tingiv kõneviis)，伝聞法 (kaudne kõneviis)，命令法 (käskiv kõneviis) がある(表4参照)．

4つの時制が区別されるのは直説法においてのみで，他の法では単純時制と完了時制が区別されるのみである．人称は，肯定形では，伝聞法を除いて，語尾によって明示されるが，否定形では，命令法において明示されるのみである．完了時制は，英語の be 動詞に相当する動詞 olema の変化形と本動詞の完了分詞を用いて表わされる．単純時制では，直説法現在が「語幹＋人称語尾」，直説法過去が「語幹＋過去標識 (-s/-si-, -i-)＋人称語尾」，条件法が「語幹＋条件法標識 (-ks/-ksi-)＋人称語尾 (現われないこともある)」，

〈表 1〉 エストニア語の階程交替

〈量的交替〉

A. 母 音	単数主格	強階程 単数分格	弱階程 単数属格	
'aa : aa	(k'aal :)	k'*aa*lu	: k*aa*lu	「重さ」
'ee : ee	(n'eem :)	n'*ee*me	: n*ee*me	「岬」
'ii : ii	(k'iil :)	k'*ii*lu	: k*ii*lu	「くさび」
'oo : oo	(k'ool :)	k'*oo*li	: k*oo*li	「学校」
'uu : uu	(k'uum :)	k'*uu*ma	: k*uu*ma	「暑い，熱い」
'õõ : õõ	(r'õõm :)	r'*õõ*mu	: r*õõ*mu	「喜び」
'ää : ää	(k'äär :)	k'*ää*ru	: k*ää*ru	「曲がり」
'öö : öö	(n'öör :)	n'*öö*ri	: n*öö*ri	「ひも」
'üü : üü	(m'üür :)	m'*üü*ri	: m*üü*ri	「壁」
'ae : ae	(l'aev :)	l'*ae*va	: l*ae*va	「船」
'oe : oe	(k'oer :)	k'*oe*ra	: k*oe*ra	「犬」
'õe : õe	(s'õel :)	s'*õe*la	: s*õe*la	「ふるい」
'äe : äe	(p'äev :)	p'*äe*va	: p*äe*va	「日」
'ai : ai	(t'aim :)	t'*ai*me	: t*ai*me	「植物」
'ei : ei	(h'ein :)	h'*ei*na	: h*ei*na	「干草」
'oi : oi	(t'oim :)	t'*oi*me	: t*oi*me	「生地」
'ui : ui	(k'uiv :)	k'*ui*va	: k*ui*va	「乾燥した」
'õi : õi	(h'õim :)	h'*õi*mu	: h*õi*mu	「部族」
'äi : äi	(k'äil :)	k'*äi*la	: k*äi*la	「へさき」
'öi : öi	(t'öin :)	t'*öi*na	: t*öi*na	「泣き声」
'au : au	(s'aun :)	s'*au*na	: s*au*na	「サウナ」
'iu : iu	(k'ius :)	k'*iu*su	: k*iu*su	「悪意」
'õu : õu	(t'õus :)	t'*õu*su	: t*õu*su	「上昇」
B. 子 音				
'pp : p	(se'pp :)	se'*pp*a	: se*p*a	「かじ屋」
'tt : t	(ko'tt :)	ko'*tt*a	: ko*t*a	「木ぐつ」
't't : t'	(ko't't :)	ko'*t't*i	: ko*t'*i	「袋」
'kk : k	(su'kk :)	su'*kk*a	: su*k*a	「くつ下」
'p : b	(vaa'p :)	vaa'*p*a	: vaa*b*a	「上薬」
m'p : mb	(kim'p :)	ki*m*'*p*u	: ki*mb*u	「束」
l'p : lb	(sil'p :)	si*l*'*p*i	: si*lb*i	「音節」
r'p : rb	(sir'p :)	si*r*'*p*i	: si*rb*i	「鎌」
't : d	(laa't :)	laa'*t*a	: laa*d*a	「定期市」
't' : d'	(vaa't' :)	vaa'*t'*i	: vaa*d'*i	「樽」
n't : nd	(vän't :)	vä*n*'*t*a	: vä*nd*a	「クランク」
n''t : n'd	(pan''t :)	pa*n*''*t*i	: pa*n'd*i	「質(しち)」
l't : ld	(pil't :)	pi*l*'*t*i	: pi*ld*i	「絵，写真」
r't : rd	(hur't :)	hu*r*'*t*a	: hu*rd*a	「猟犬」
'k : g	(mõõ'k :)	mõõ'*k*a	: mõõ*g*a	「剣」
n'k : ng	(kin'k :)	ki*n*'*k*u	: ki*ng*u	「小山，丘」
l'k : lg	(pol'k :)	po*l*'*k*u	: po*lg*u	「連隊」
r'k : rg	(võr'k :)	võ*r*'*k*u	: võ*rg*u	「網，ネット」
'ps : ps	(li'ps :)	li'*ps*u	: li*ps*u	「ネクタイ」
'pl : bl	(kubel :)	ku'*pl*a	: ku*bl*a	「水ぶくれ」

(次ページに続く)

——〈表 1〉 エストニア語の階程交替(続)

	単数主格	強階程 単数分格	弱階程 単数属格	
\pr : br	(sõber :)	sõ*pra*	: sõ*br*a	「友人」
\ts : ts	(me\ts :)	me*tsa*	: me*ts*a	「森」
\tk : tk	(jä\tk :)	jä*tk*u	: jä*tk*u	「続き」
\tr : dr	(põder :)	põ*tra*	: põ*dr*a	「オオシカ」
\tv : dv	(la\tv :)	la*tva*	: la*dv*a	「頂」
\t'j : d'j	(padi :)	pa*t'ja*	: pa*d'j*a	「まくら」
\ks : ks	(pa\ks :)	pa*ksu*	: pa*ks*u	「厚い」
\kl : gl	(vagel :)	va*kla*	: va*gl*a	「うじ虫」
\mm : mm	(sa\mm :)	sa*mmu*	: sa*mm*u	「歩み」
\nn : nn	(ka\nn :)	ka*nnu*	: ka*nn*u	「水差し」
\n'n : n'n	(ka\n'n :)	ka*n'ni*	: ka*n'n*i	「おもちゃ」
\ll : ll	(ha\ll :)	ha*lla*	: ha*ll*a	「霜」
\l'l : l'l	(ha\l'l :)	ha*l'li*	: ha*l'l*i	「灰色の」
\rr : rr	(vu\rr :)	vu*rri*	: vu*rr*i	「こま」
\ss : ss	(mä\ss :)	mä*ssu*	: mä*ss*u	「反乱」
\s's : s's	(ka\s's :)	ka*s'si*	: ka*s's*i	「ネコ」
\ss : s	(poi\ss :)	poi*ssi*	: poi*s*i	「少年」
\šš : š	(tu\šš :)	tu*ššii*	: tu*š*i	「墨」
\š : š	(rüü\š :)	rüü*ši*	: rüü*š*i	「フリル」
\ff : f	(še\ff :)	še*ffi*	: še*f*i	「かしら，長」
\f : f	(sei\f :)	sei*fi*	: sei*f*i	「金庫」
\hh : hh	(ša\hh :)	ša*hhi*	: ša*hh*i	「王手(チェスで)」
n\ss : ns	(šan\ss :)	ša*n**ssi*	: ša*ns*i	「チャンス」
l\ss : ls	(val\ss :)	va*l**ssi*	: va*ls*i	「ワルツ」
r\ss : rs	(mar\ss :)	ma*r**ssi*	: ma*rs*i	「マーチ」
\ng : ng	(ki\ng :)	ki*nga*	: ki*ng*a	「くつ」
\lm : lm	(si\lm :)	si*lma*	: si*lm*a	「目」
\lv: : lv	(re\lv :)	re*lva*	: re*lv*a	「武器」
\l'j : l'j	(väli :)	va*l'jä*	: vä*l'j*a	「野」
\lf : lf	(go\lf :)	go*lfi*	: go*lf*i	「ゴルフ」
\rm : rm	(nu\rm :)	nu*rme*	: nu*rm*e	「草地」
\rn : rn	(to\rn :)	to*rni*	: to*rn*i	「塔」
\rl : rl	(pä\rl :)	pä*rli*	: pä*rl*i	「真珠」
\rv : rv	(kõ\rv :)	kõ*rva*	: kõ*rv*a	「耳」
\rj : rj	(puri :)	pu*rje*	: pu*rj*e	「帆」
\rš : rš	(ma\rš :)	ma*rši*	: ma*rš*i	「低湿地」
\st : st	(te\st :)	te*sti*	: te*st*i	「テスト」
\sk : sk	(kask :)	ka*ski*	: ka*sk*i	「かぶと」
\sv : sv	(ra\sv :)	ra*sva*	: ra*sv*a	「脂肪」
\s'j : s'j	(asi :)	a*s'ja*	: a*s'j*a	「もの，こと」
\hm : hm	(rü\hm :)	rü*hma*	: rü*hm*a	「グループ」
\hn : hn	(lõ\hn :)	lõ*hna*	: lõ*hn*a	「香り」
\hl : hl	(ma\hl :)	ma*hla*	: ma*hl*a	「ジュース」
\hr : hr	(kõ\hr :)	kõ*hra*	: kõ*hr*a	「軟骨」
\hv : hv	(ko\hv :)	ko*hvi*	: ko*hv*i	「コーヒー」
\hj : hj	(ahi :)	a*hju*	: a*hj*u	「暖炉」
m\ps : mps	(kam\ps :)	ka*m**psu*	: ka*mps*u	「荷物」

(次ページに続く)

——〈表 1〉 エストニア語の階程交替(続)

	単数主格	強階程 単数分格	弱階程 単数属格	
n\ts : nts	(tan\ts :)	tan\tsu	: tantsu	「ダンス」
n'\st : n'st	(kun'\st :)	kun'\sti	: kun'sti	「芸術」
n\ks : nks	(lon\ks :)	lon\ksu	: lonksu	「ひと飲み」
l\ts : lts	(selts :)	sel\tsi	: seltsi	「仲間」
l\st : lst	(pul\st :)	pul\sti	: pulsti	「粗い毛のかたまり」
l\ks : lks	(kol\ks :)	kol\ksu	: kolksu	「衝突」
r\ts : rts	(kõr\ts :)	kõr\tsi	: kõrtsi	「居酒屋」
r\st : rst	(ar\st :)	ar\sti	: arsti	「医者」
〈質的交替〉				
b : φ	(tuba :)	tuba	: t\oa	「家」
	(k\uub :)	k\uube	: kuue	「上着」
b : v	(tõbi :)	tõbe	: tõve	「病気」
d : φ	(pidu :)	pidu	: p\eo	「祝い」
	(s\aad :)	s\aadu	: s\ao	「干草の山」
	(j\õud :)	j\õudu	: j\õu	「力」
	(l\uud :)	l\uuda	: luua	「ホウキ」
	(l\eid :)	l\eidu	: leiu	「しり帯(馬具)」
d : j	(pada :)	pada	: paja	「ナベ」
g : φ	(mägi :)	mäge	: m\äe	「山」
	(l\õõg :)	l\õõga	: l\õa	「端綱(馬具)」
	(t\õug :)	t\õugu	: t\õu	「春穀物」
	(l\iig :)	l\iiga	: liia	「過多」
	(l\õug :)	l\õuga	: lõua	「あご」
s/t : φ	(käsi :)	kä\tt	: k\äe	「手」
	(\uus :)	\uut	: uue	「新しい」
\lb : lv	(ha\lb :)	ha\lba	: halva	「悪い」
\rb : rv	(ku\rb :)	ku\rba	: kurva	「悲しい」
\mb : mm	(ku\mb :)	ku\mba	: kumma	「どちら」
\ld : ll	(va\ld :)	va\lda	: valla	「農村共同体」
ld : l	(k\eeld :)	k\eeldu	: keelu	「禁止」
\rd : rr	(ko\rd :)	ko\rda	: korra	「秩序」
rd : r	(k\aard :)	k\aardu	: kaaru	「曲がり」
\nd : nn	(hä\nd :)	hä\nda	: hänna	「尾」
\n'd : n'n	(kõn'd :)	kõ\n'di	: kõn'ni	「歩くこと」
nd : n	(s\uund :)	s\uunda	: suuna	「方向」
\lg : l	(su\lg :)	su\lgu	: sulu	「カッコ」
\lg : lj	(nä\lg :)	nä\lga	: nälja	「空腹」
\rg : r	(o\rg :)	o\rgu	: oru	「谷」
\rg : rj	(kä\rg :)	kä\rge	: kärje	「ハチの巣」
\rs/r\t : rr	(va\rs :)	var\t	: varre	「茎」
\ht : h	(ko\ht :)	ko\hta	: koha	「箇所」
\hk : h	(lo\hk :)	lo\hku	: lohu	「くぼみ」
\sk : s	(kä\sk :)	kä\sku	: käsu	「命令」
r\sk : rs	(mür\sk :)	mür\skn	: mürsu	「砲弾」

〈表 2〉 名詞 kõne「話」の語形変化

格の名称			単数	複数
主格	(nimetav, nominative)		kõne	kõne-d
属格	(omastav, genitive)	「～の」	kõne	kõne-de
分格	(osastav, partitive)		kõne-t	kõne-sid
入格	(sisseütlev, illative)	「～の中へ」	kõne-sse	kõne-de-sse
内格	(seesütlev, inessive)	「～の中で」	kõne-s	kõne-de-s
出格	(seestütlev, elative)	「～の中から」	kõne-st	kõne-de-st
向格	(alaleütlev, allative)	「～へ」	kõne-le	kõne-de-le
接格	(alalütlev, adessive)	「～で」	kõne-l	kõne-de-l
奪格	(alaltütlev, ablative)	「～から」	kõne-lt	kõne-de-lt
変格	(saav, translative)	「～に(なる)」	kõne-ks	kõne-de-ks
到格	(rajav, terminative)	「～まで」	kõne-ni	kõne-de-ni
様格	(olev, essive)	「～として」	kõne-na	kõne-de-na
欠格	(ilmaütlev, abessive)	「～なしに」	kõne-ta	kõne-de-ta
共格	(kaasaütlev, comitative)	「～とともに」	kõne-ga	kõne-de-ga

〈表 3〉 場所格

	内部格	外部格
到着点	入格：-sse (sisseütlev) 「～中へ」	(向格)：-le (alaleütlev) 「～の上(表面，近傍)へ」
静止位置	内格：-s (seesütlev) 「～の中で」	接格：-l (alalütlev) 「～の上(表面，近傍)で」
起点	出格：-st (seestütlev) 「～の中から」	奪格：-lt (alaltütlev) 「～の上(表面，近傍)から」

例：入格 / 向格	merre (mere-sse)	/ mere-le
	海中へ	海上へ
内格 / 接格	mere-s	/ mere-l
	海中で	海上で
出格 / 奪格	mere-st	/ mere-lt
	海中から	海上から

伝聞法が「語幹＋vat」，命令法が「語幹＋命令法の人称語尾」，という構造をしている．

不定人称形は，「語幹＋不定人称標識 (-ta-, etc.)」という形の不定人称語幹をもとにつくられる．

否定形は，一般に，否定を表わす不変化詞 ei と本動詞で表わされ，本動詞には，人称語尾がつかない．ただし，命令法では，特別な否定を表わす形式があり，人称変化する．動詞の不定形（不定詞形，分詞形，副動詞形）も少なくない（表5参照）．

エストニア語の語構成は，派生接尾辞によるものと複合語形成によるものとに分けられる．1つの語根ないしは語幹からつくられる派生語の数は，一般にかなり多い．たとえば，kiri (語幹 kirja-)「書かれたもの，手紙」から，

kirjalik「文章の，書かれた」，kirjand「作文」，kirjandus「文学」，kirjanik「作家」，kirjama「模様をつける」，kirjastama「出版する」，kirje「帳簿記入」，kirjeldama「記述する」，kirju「色とりどりの」，kirjutama「書く」

などが派生され，これらからさらに，

kirjanduslik「文学の」，kirjastaja「出版業者」，kirjastus「出版社」，kirjendama「帳簿に記入する」，kirjeldus「記述」，kirjutaja「書き手」，kirjutis「書かれたもの」，kirjutus「書くこと」

などが派生される．

エストニア語の主な派生接尾辞を表6に掲げる．

複合語もよく用いられ，比較的長いものもめずらしくない．

õige | keelsus || sõna | raamat「正用法辞典」

mere|||suur|tüki||vägi「海軍砲兵隊」

taas||üles|ehitamis|||aeg「再建期」

複合語には，第1構成要素が，

1) 主格または子音でおわる語幹（語根）の形をしているもの (vesi|ravi「水治療法」，raud|tee「鉄道」，kaug|õpe「通信教育」cf. kauge「遠い」)

2) 属格の形をしているもの (vee|loom「水棲動物」cf. vesi「水」，naiste|vihkaja「女嫌い」cf. naine「女性」)

3) それ以外の格形をしているもの(表7参照)

がある．3のタイプは，第2構成要素が動詞から派生した名詞(形容詞)であるのが通例で，対応する動詞句があるという特徴がある．

複合動詞には，対応する複合名詞からの派生と考えることができるもの，たとえば，

abi|elu「結婚」—abielluma「結婚する」

heli|lind「録音テープ」—helilindistama「録音

〈表 4〉 動詞 elama「生きる」の語形変化

肯 定 形

《直説法現在》

ma	ela-n	「私は生きている」
sa	ela-d	
ta	ela-b	
me	ela-me	
te	ela-te	
nad	ela-vad	

《直説法現在完了》

ma	olen	ela-nud
sa	oled	
ta	on	
me	oleme	
te	olete	
nad	on	

《直説法過去》

ma	ela-si-n	「私は生きていた」
sa	ela-si-d	
ta	ela-s	
me	ela-si-me	
te	ela-si-te	
nad	ela-si-d	

《直説法過去完了》

ma	olin	ela-nud
sa	olid	
ta	oli	
me	olime	
te	olite	
nad	olid	

《条件法現在》

ma	ela-ks[in]	「私は生きるであろう」
sa	ela-ks[id]	
ta	ela-ks	
me	ela-ks[ime]	
te	ela-ks[ite]	
nad	ela-ks[id]	

《条件法完了》

ma	oleks[in]	ela-nud ～	ma	ela-nu-ks[in]
sa	oleks[id]		sa	ela-nu-ks[id]
ta	oleks		ta	ela-nu-ks
me	oleks[ime]		me	ela-nu-ks[ime]
te	oleks[ite]		te	ela-nu-ks[ite]
nad	oleks[id]		nad	ela-nu-ks[id]

《伝聞法現在》

ma	ela-vat	「生きているそうだ」
sa		
ta		
me		
te		
nad		

《伝聞法完了》

ma	olevat ela-nud ～		ma	ela-nu-vat
sa			sa	
ta			ta	
me			me	
te			te	
nad			nad	

《命令法現在》

	—	
	ela	「生きなさい」
ta	ela-gu	
	ela-gem ～ ela-me	
	ela-ge	
nad	ela-gu	

《命令法完了》

	—	
	ole	ela-nud
ta	olgu	
	olgem	
	olge	
nad	olgu	

否 定 形

《直説法現在》

ma	ei ela	「生きていない」
sa		
ta		
me		
te		
nad		

《直説法現在完了》

ma	ei ole ela-nud
sa	
ta	
me	
te	
nad	

（次ページに続く）

——〈表 4〉 動詞 elama「生きる」の語形変化(続)

《直説法過去》

ma, sa, ta, me, te, nad } ei ela-nud 「生きていなかった」

《直接法過去完了》

ma, sa, ta, me, te, nad } ei olnud ela-nud

《条件法現在》

ma, sa, ta, me, te, nad } ei ela-ks 「生きないだろう」

《条件法完了》

ma, sa, ta, me, te, nad } ei oleks ela-nud ～ ei ela-nu-ks

《伝聞法現在》

ma, sa, ta, me, te, nad } ei ela-vat 「生きていないそうだ」

《伝聞法完了》

ma, sa, ta, me, te, nad } ei olevat ela-nud ～ ei ela-nuvat

《命令法現在》

	—		
	ära	ela	「生きるな」
ta	ärgu	ela-gu	
	ärgem	ela-gem ～ ärme ela-me	
	ärge	ela-ge	
nad	ärgu	ela-gu	

《命令法完了》

	—	
	—	
ta	ärgu	olgu ela-nud
	—	
	—	
nad	ärgu	olgu ela-nud

《非人称形・肯定》

直説法現在	ela-ta-kse	直説法現在完了	on	ela-tud
直説法過去	ela-ti	直説法過去完了	oli	
条件法現在	ela-ta-ks	条件法完了	oleks	
伝聞法現在	ela-ta-vat	伝聞法完了	olevat	
命令法現在	ela-ta-gu	命令法完了	olgu	

《非人称形・否定》

直説法現在	ei ela-ta	直説法現在完了	ei ole	ela-tud
直説法過去	ei ela-tud	直説法過去完了	ei olnud	
条件法現在	ei ela-ta-ks	条件法完了	ei oleks	
伝聞法現在	ei ela-ta-vat	伝聞法完了	ei olevat	
命令法現在	ärgu ela-ta-gu	命令法完了	ärgu olgu	

する」

esi|etendus「初演」—esietendama「初演する」

のほかに，動詞に副次的な意味を添える副詞的小詞がついたもの，たとえば，

kirjutama「書く」—alla kirjutama「署名する」，maha kirjutama「書き写す」，ümber kirjutama「書き直す」

がある．

後置詞や副詞の中には，格語尾が識別可能なものが多くある．

seal／sealt「そこで／そこから」

kaugele／kaugel／kaugelt「遠くへ／遠くで／遠くから」

kuhu／kus／kust「どこへ／どこで／どこから」

ette／ees／eest「(～の) 前へ／前で／前から」

peale／peal／pealt「(～の) 上へ／上で／上から」

日本語のいわゆる形式名詞に相当する名詞の格形と考えられる場合も多い．

vahe「あいだ」—vahele／vahel／vahelt「(～の) 間へ／間で／間から」

[文の構造] エストニア語の，文の基本的語順は，「主語—動詞—その他の成分」で，自動詞文，他動詞文いずれの場合も，主語は主格で現われる．形容詞修飾句と属格名詞句は，ともに修飾される名詞に先行する．後置詞が主体だが，前置詞もかなり多い．比較構文で，比較の基準を表わす名詞句は，形容詞(の比較級)の前にも後にも現われることができる(表8，例文 1a, 1b)．

疑問文は，平叙文の文頭に，小詞 kas をつけるか (2b)，文の成分のどれかを疑問詞でおきかえて文頭に移動させて (2c) つくられる．いずれの場合も，文の他の部分の語順は，平叙文のままに保たれるのがふつうである．

〈表 5〉 動詞 elama「生きる」の不定形

«ma-不定詞»		
	ela-ma	
内 格	ela-ma-s	「生きて」
出 格	ela-ma-st	「生きることから」
変 格	ela-ma-ks	「生きるために」
欠 格	ela-ma-ta	「生きないで」
«da-不定詞»		
	ela-da	
«副動詞»		
	ela-des	「生きながら」
«分 詞»		
	能 動	受動(不定人称)
現 在	ela-v	ela-ta-v
完 了	ela-nud	ela-tud

〈表 6〉 エストニア語の主要な派生接尾辞

1. 「動作主」など
   - -ja　　õpeta-ja : õpeta-
     「教える人，教師」:「教える」
   - -nik　　kirja-nik : kirja-
     「作家」:「書いたもの，手紙」
2. 「動作，行為」
   - -mine　　õpeta-mine : õpeta-
     「教えること」:「教える」
   - -us　　õpet-us : õpeta-
     「教え」:「教える」
3. 「場所」
   - -la　　söök-la : söök
     「食堂」:「食事」
   - -mu　　ela-mu : ela-
     「住居」:「住む」
4. 集合名詞
   - -stik　　sõna-stik : sõna
     「辞書，語彙集」:「語，単語」
   - -kond　　tee-kond : tee
     「旅行，行程」:「道」
5. 「性質，状態」を表わす名詞
   - -us　　haig-us : haige
     「病気」:「病気の」
6. ある性質があることを表わす形容詞
   - -ne　　nahk-ne : nahk
     「皮製の」:「皮」
   - -line　　sõna-line : sõna
     「ことばで表わした」:「語，単語」
   - -lik　　lapse-lik : laps
     「子供のような」:「子供」
   - -kas　　ande-kas : ande-
     「才能のある」:「才能」
7. ある性質がないことを表わす形容詞
   - -tu　　kasu-tu : kasu
     「役に立たない」:「利益」
8. 副 詞
   - -sti　　kena-sti : kena
     「みごとに，美しく」:「よい，美しい」
   - -lt　　ausa-lt : ausa-
     「公正に」:「公正な」
   - -(i)ti　　talv-iti : talv
     「冬ごとに」:「冬」
9. 動 詞
   - -ta- (-da-)　　kuku-ta- : kukku-
     「落とす」:「落ちる」
   - -ne-　　värske-ne- : värske
     「元気になる」:「元気な，新鮮な」

従属節には，接続詞を用いるもの (3a, 3b) と，動詞の不定形 (分詞形，副動詞形) を用いるもの (4a, 4b) とがある．疑問文は，そのまま名詞節になることができる(3c).

関係節には，関係詞を用いるもの (5b, 5c) と，動詞の分詞形を用いるもの (5d) とがあり，前者は主名詞の後に，後者は主名詞の前に現われる．後者のタイプの関係節は，主名詞が，関係節の中で，主語または直接目的語として解釈される場合に限って用いられるが，前者のタイプの関係節には，そのような制限はない．

直接目的語は，「対格」もしくは分格で表示される．目的語が「対格」で表示されるのは，次の3つの条件がすべて満たされている場合である．

1) 肯定文である(6a).
2) 行為が，完結，完了しているか，完結，完了することが想定される(7a).
3) 行為が目的語の表わす対象の全体に及ぶ(8a).

ここで「対格」というのは，統語的概念で，単数の場合は属格または主格で，複数の場合は常に主格で表示される目的語のことである．単数の「対格」目的語が主格で表示されるのは，

1) 命令法(9b)
2) 動詞が不定人称形 (umbisiklik) の文 (9c)
3) 動詞が常に3人称単数形で現われる非人称の構文(9d)

などにおいてである．

動詞が不定人称形の構文は，おおむね受身の文に相当すると考えてよいが，この構文には，

1) 通常の文の主語にあたる成分 (動作主) が現われることができない，
2) 通常の文で目的語として現われる名詞句は，「非人称」構文でも目的語の格表示をうける(10a),
3) 動詞が「不定人称形」とよばれる形をとる，
4) 自動詞からもつくられる(10b),
5) 動作主(行為者)として常に人間が想定される，

という特徴がある．

使役は，英語の let に相当する動詞 laskma の変化形と動詞の不定詞を用いて表わされる．動作主 (causee) は，分格または接格の格表示をうける．動詞 laskma を用いた使役構文の意味は，許容的なことも (11b)，そうでないこともある (11c).

存在文(および，その特別な場合としての所有文)は，「場所格名詞句＋動詞 olla の3人称単数形＋主格または分格の名詞句」という構文で表わされ (12)，場所格名詞句が，存在場所ないしは所有者を表わす．存在するもの(または所有されるもの)を表わす名詞句は，肯定文ではふつう主格で，否定文では分格で表示される (13)．存在文とよく似た構文をとる自動詞がかなりあり (14)，これらも広い意味で「存在文」の仲間として考えることができる．

[方　言]　エストニア共和国でエストニア語が話されている地域は，現在のエストニア共和国の領土とほぼ一致する．

8つの方言区域に分けられるが，これらは3つの方言群にまとめられる．

1) 北エストニア語諸方言 (põhjaeesti murderühm)——東方言 (idamurre)，中央方言 (keskmurre)，西方言(läänemurre)，島部方言(saarte murre)
2) 南エストニア語諸方言 (lõunaeesti murde-

〈表 7〉 複合名詞の第1構成要素の格

内　格	koolis|käija 「学校に通う人」	⇦	käi- 「行く」		kooli-s 「学校(内格)」
出　格	peast|arvutamine 「暗　算」	⇦	arvuta- 「計算する」		pea-st 「頭(出格)」
入　格	meelde|tuletus 「思い出させること」	⇦	tuleta- 「引き出す」	(midagi) (「何かを」)	meel-de 「心(入格)」
接　格	kalal|käik 「魚をつりに行くこと」	⇦	käi- 「行く」		kala-l 「魚(接格)」
奪　格	kohalt|nihutus 「解任すること」	⇦	nihuta- 「転置する」		koha-lt 「位置(奪格)」
向　格	marjule|minek 「野いちごを採集に行くこと」	⇦	mine- 「行く」		marju-le 「野いちご(複数向格)」
変　格	halvaks|panu 「軽蔑すること」	⇦	pane- 「置く」	(midagi) (「何かを」)	halva-ks 「悪い(変格)」
欠　格	tööta|olek 「失　業」	⇦	ole- 「いる」		töö-ta 「仕事(欠格)」
共　格	käega|löömine 「見捨てること」	⇦	löö- 「打つ」	(millelegi) (「何かへ」)	käe-ga 「手(共格)」

〈表 8〉 エストニア語の文の構造

1. a. Mati on *Peetri-st* pike-m.
マッティ である ペーテル(出格) 長い(比較級)
b. Mati on pike-m *kui Peeter.* 「マッティはペーテルより背が高い」
マッティ である 長い(比較級) より ペーテル

2. a. Peeter on kodus. 「ペーテルは家にいる」
ペーテル いる 家に
b. *Kas* Peeter on kodus? 「ペーテルは家にいるか」
疑問小辞 ペーテル いる 家に
c. *Kus* Peeter on? 「ペーテルはどこにいるのか」
どこに ペーテル いる

3. a. Kuulsin, *et* vend kõneles toas. 「私は兄が部屋で話しているのを聞いた」
私は聞いた 接続詞 兄 話していた 部屋で
b. *Kui* tuleb suvi, saabuvad pääsukesed. 「夏が来ると，ツバメたちがやってくる」
～とき 来る 夏 到着する ツバメ(複)
c. Mati küsib, *kas Peeter on kodus.* 「マッティはペーテルは家にいるかと尋ねる」
マッティ 質問する 疑問小辞 ペーテル いる 家に

4. a. Kuulsin *venda toas kõneleva-t.* 「私は兄が部屋で話しているのを聞いた」
私は聞いた 兄(分格) 部屋で 話す(現在分詞, 分格)
b. *Suve tulles* saabuvad pääsukesed. 「夏が来ると，ツバメたちがやってくる」
夏(属格) 来る(副動詞) 到着する ツバメ(複)

5. a. Peeter saatis Antsu-le kirja. 「ペーテルはアンツに手紙を送った」
ペーテル 送った アンツ(向格) 手紙(対格)
b. kiri, *mille Peeter Antsu-le saatis* 「ペーテルがアンツに送った手紙」
手紙 関係代名詞(対格) ペーテル アンツ(向格) 送った
c. Ants, *kelle-le Peeter kirja saatis* 「ペーテルが手紙を送った(ところの)アンツ」
アンツ 関係代名詞(向格) ペーテル 手紙(対格) 送った
d. *Peetri Antsu-le saadetud* kiri 「ペーテルがアンツに送った手紙」
ペーテル(属格) アンツ(向格) 送る(分詞形) 手紙

6. a. Peeter ostis *raamatu.* 「ペーテルは本を買った」
ペーテル 買った 本(対格)
b. Peeter ei ostnud *raamatu-t.* 「ペーテルは本を買わなかった」
ペーテル 買わなかった 本(分格)

7. a. Laine luges *raamatu* läbi. 「ライネは本を読了した」
ライネ 読んだ 本(対格) 通して
b. Laine loeb *raamatu-t.* 「ライネは本を読んでいる」
ライネ 読む 本(分格)

8. a. Ostsin kaupluse-st *leiva.* 「私は(特定量の)パンを店で買った」
私は買った 店(出格) パン(対格)
b. Ostsin kaupluse-st *leiba.* 「私はパンを店で買った」
私は買った 店(出格) パン(分格)

9. a. Peeter ostab *raamatu.* 「ペーテルは本を買う」
ペーテル 買う 本(対格)
b. Osta *raamat!* 「本を買いなさい」
買いなさい 本(主格)
c. *Raamat* oste-takse. 「本が買われる」
本(主格) 買う(不定人称形)
d. Mind huvitab *raamat* osta. 「私は本を買うことに興味がある」
私(分格) 興味をもたせる 本(主格) 買う

10. a. Siin ehita-takse *uut maja.* 「ここでは新しい家が建築中である」
ここで 建てる(不定人称形) 新しい(分格) 家(分格)
b. Pühapäeva-l *käi-akse* külas. 「日曜日には人のお宅にうかがう」
日曜日(接格) 行く(不定人称形) お客に

(次ページに続く)

——〈表 8〉 エストニア語の文の構造(続)

11.	a.	Jaan laskis *mehi* puhata. ヤーン させた 男(複数分格) 休む	「ヤーンは男たちを休息させた」
	b.	Valvur laskis *vangi-l* põgeneda. 看守 させた 囚人(接格) 逃げる	「看守は囚人を逃がしてやった」
	c.	Laske *ta-l* seda korrata! させなさい 彼(接格) それ(分格) くり返す	「彼にそれをくり返させなさい」
12.	a.	Laua-l on raamat. 机(接格) ある 本(主格)	「机の上に本がある」
	b.	Mu-l on uus ülikond. 私(接格) ある 新しい スーツ(主格)	「私は新しいスーツを持っている」
13.	a.	Laua-l ei ole *raamatu-t.* 机(接格) ない 本(分格)	「机の上に本がない」
	b.	Mu-l ei ole *uut ülikonda.* 私(接格) ない 新しい スーツ(分格)	「私は新しいスーツを持っていない」
14.		Ajakirja-l *tekkis* kaastöölisi. 雑誌(接格) 生じた 協力者(複数分格)	「その雑誌には投稿者が(何人か)現われた」

rühm)——ムルキ方言 (mulgi murre), タルト方言 (tartu murre), ヴォル方言 (võru murre)

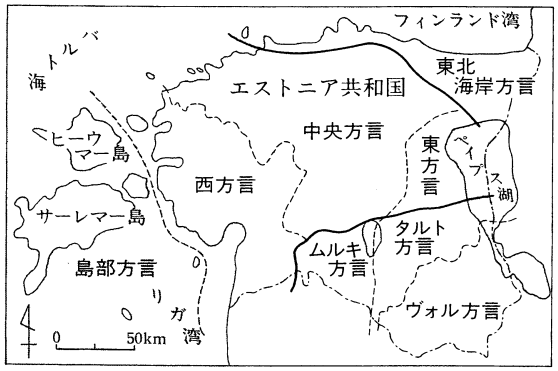
3) 東北海岸方言 (kirde-eesti rannikumurre)

標準語は，北エストニア語の中央方言を基礎としているが，南エストニア語の要素もかなりとり入れられている．

南エストニア語は，かつてタルト方言にもとづく独自の文語をもっていた．北エストニア語と南エストニア語の間には，たとえば，次のような違いをあげることができる(表 9 参照)．

1) 北エストニア語(および標準語)ではみられない母音調和が，南エストニア語にある．
2) 南エストニア語で i, ü で終わる二重母音が，北エストニア語 (標準語) では e, i で終わる．
3) 南エストニア語の長母音 ää, õõ に対し，北エストニア語では ea, õe が対応する．
4) 南エストニア語では，名詞の複数主格形の語尾 -d (<*-t) が一般に消失している．
5) 内格語尾は，北エストニア語 (標準語) では -s (<*-sna/-snä) であるが，南エストニア語では -(h)n ～ -h である．
6) 動詞の過去の標識として，北エストニア語(標準語) では -si-，南エストニア語では -i- が一般的である．
7) 南エストニア語では否定の動詞に過去形がある．
8) 南北エストニア語には 語彙の点でも 違いがある．

〈図〉 エストニア語の方言区画



東北海岸方言は，従来，北エストニア語のグループに含められるのが通例であったが，最近は，北エストニア語とは独立した方言と考えられるようになっている．この方言と北エストニア語の中央方言との間に，たとえば，次のような違いが指摘される(表 10 参照)．

1) 東北海岸方言には，中央方言(標準語)にみられる長音と超長音の対立がない．
2) 中央方言(標準語)で消失している語中や語末の母音が一般に保たれている．
3) 中央方言(標準語)にみられる超長の子音を含む単数入格が用いられない．
4) 様格が用いられる．
5) 否定動詞が人称変化する．

この方言とフィンランド語(とくに南西方言)との間の類似性はしばしば指摘されており，フィンランド語でエストニア(およびエストニア語) をさす viro という語が，この方言の話されている地方の名 Virumaa (maa は「地方，国」) に由来していることと合わせ，この地域からフィンランド南西海岸への移住が行なわれたと考える学者もいる．

[歴　史]　今日エストニア語という言語の成立には，後期フィン祖語(→『大辞典』バルト・フィン諸語)が統一性を失って，しだいに分裂していく過程で生まれた 3 つの「言語」が関与したが，これらは，現在の

北エストニア語，南エストニア語，東北海岸方言として受け継がれていると考えられている．エストニア語でエストニア(エストニア人)を意味する eesti (eestlane) は，本来，他称であり，エストニア人たちはもともと自分たちを maarahvas (maa「国，地方」，rahvas「人々」)，自分たちの言語を maakeel (keel「舌，言語」) と称していた．エストニア語に特徴的な長音と超長音の対立を含む階程交替は，1500年ごろまでに成立し，母音調和は，17世紀ごろ消失したものと考えられている．

エストニア語の記録されたものとしてもっとも古いものは，1220年代に書かれた『リボニア年代記』(*Chronicon Livoniae*) や，デンマークの検地記録 (*Liber Census Daniae*, 1241) に記されているエストニアの地名や人名である．これより以前のエストニア語の歴史は，比較言語学的方法によらなければ知ることができない．現存するもっとも古いエストニア語のテキストとしては，1520年代に書かれた『クラマー (Kullamaa) の祈禱書』と通称される手稿があるが，印刷されたものとしては，1535年に，ドイツのウィッテンベルク (Wittenberg) で出版されたワンラト (S. Wanradt) とコール (J. Koell) の教理問答集 (Catechismus) が最古である．

17世紀ごろから，北エストニア語地域の中心タリン (Tallinn, ドイツ語名 Reval) と，南エストニア語地域の中心タルト (Tartu, ドイツ語名 Dorpat) において，それぞれの方言にもとづいた独自の文語（北エストニア文語，南エストニア文語とよばれる）が別々に用いられるようになる．北エストニア文語で著作を行なった人としては，シュタール (Heinrich Stahl, ca. 1600～57) が有名であるが，彼は，最初のエストニア語文法 *Anführung zu der Esthnischen Sprach* (1637) を著して，北エストニア文語の成立に大きな役割を果たした．南エストニア文語の作品としては，ウィルギニウス (Adrian Virginius, 1663～1706) の新約聖書のエストニア語訳 (*Meije Issanda JEsusse Kristusse Wastne Testament*, 1686) がよく知られている．また，グーツラフ (Johann Gutslaff,

〈表 9〉 北エストニア語と南エストニア語

	標準語		北エストニア語	南エストニア語
1)	väsinud	「疲れた」	väsinud	väsünü
2)	aeg	「時間」	aeg	aig
	täis	「満ちた」	täis	täüs
3)	pea	「頭」	pea	pää
	võõras	「見知らぬ」	võeras	võõras
4)	silmad	「目(複数主格)」	silmad	silmä
5)	metsas	「森で」	metsas	mõtsa(h)n ～ mõtsah
6)	ma võtsin	「(私が)手にとった」	ma võtsin	ma võti
7)	ei olnud	「～でなかった」	ei olnud	es ole
8)	語彙	「洗う」	pesema	mõskma
		「恐れる」	kartma	pelgama
		「泣く」	nutma	ikma
		「犬」	koer	peni
		「オオカミ」	hunt	susi
		「樺」	kask	kõiv
		「松」	mänd	pedajas

〈表 10〉 東北海岸方言と北エストニア語の中央方言

	標準語		中央方言	東北海岸方言
1)	mu'st : mustad	「黒い」	mu'st : mustad	must : mustad
	võ'tta : võtan[-ť-]	「手にとる」	võ'tta : võtan [-ť-]	ottama : odan[-t-]
2)	raudne	「鉄の」	raudne	raudane
	nõel	「針」	nõel	neula
3)	tu'ppa	「部屋(単数入格)」	tu'ppa	tuba
4)	noorena	「若い(単数接格)」	—	nuorena
5)	ei tule	「来ない」	ei tule	en/et/ei/emma/etta/evad tule

?～1657）は，南エストニア諸方言にもとづく文法 *Observationes Grammaticae circa linguam Esthonicam* (1648) を著した．

いわゆる「旧表記法 (vana kirjaviis)」とよばれる正書法 (*temma*, *minna*——現在では *tema*, *mina*; *kele*, *ramat*——現在では *keele*, *raamat*) が確立したのは，17 世紀の末である．

北エストニア文語が優位に立つ契機となったのは，何といっても聖書の北エストニア文語への翻訳(*Piibli Ramat*, 1739) であるが，北方戦争 (1700～21) で，タルトが荒廃し，大学が閉鎖されたことも，南エストニア文語の衰退をうながした．聖書の翻訳に中心的役割を果たしたヘレ (Anton Thor Helle, 1683～1748) は，1732年に，北エストニア語の文法書 *Kurzgefaszte Anweisung zur Ehstnischen Sprache* を著しているが，この本には，7千語に及ぶ語彙集のほか，ことわざ，慣用句，なぞなぞ，などが付録としてつけられている．18 世紀の後半になると，世俗的な出版物も数多く出るようになるが，この時期の人としては，フペル (August Wilhelm Hupel, 1737～1819) がよく知られており，彼の北エストニア諸方言と南エストニア諸方言の両方を扱った著作 *Ehstnische Sprachlehre für beide Hauptdialekte* (1780) には，1万5千語を越える語彙集がつけられている．

18世紀の末ごろから，エストニアの知識人の間では，エストニア語を洗練して地位を高めようとする動きが活発になるが，エストニア語の文法や語彙，あるいは民間伝承などに関する討論の場を提供したのは，ローゼンプレンター (Johann Heinrich Rosenplänter, 1782～1846)の主宰した雑誌 *Beiträge zur genauern Kenntniss der ehstnischen Sprache* (1813～32) であった．正書法に õ を導入することを提案したマシンク (Otto Wilhelm Masing, 1763～1832) も，この雑誌の投稿者のひとりである．また，1838 年には，エストニア語の研究と資料収集を目的として掲げる「エストニア学識者協会 (Gelehrte Esthnische Gesellschaft; Õpetatud Eesti Selts)」が結成されたが，その中心となったのは，後に(1842～50)，タルト大学のエストニア語の講師をつとめることになるフェールマン (Friedrich Robert Faehlmann, 1798～1850) であった．エストニアの国民文学とよべるものが誕生するのは，ちょうど，この時代である．フェールマンによって構想された国民的叙事詩『カレビポエク(*Kalevipoeg*)』は，クロイツワルト (Friedrich Reinhold Kreutzwald, 1803～82) の手で完成され (1857～61)，エストニア人の民族意識の形成に大きな役割を果たした．

エストニア語の正書法を「旧表記法」から現在の正書法，いわゆる「新表記法 (uus kirjaviis)」に変えようとしていた人々にとって，決定的な意味をもったのは，アーレンス (Eduard Ahrens, 1803～63) の *Grammatik der Ehstnischen Sprache Revalschen Dialektes* (I, 1843; I-II, 1853) である．また，エストニア語の言語学的な研究の分野では，ビーデマン (Ferdinand Johann Wiedemann, 1805～87) が，資料の範囲と正確さの点で今日でも言語学的価値を失っていない『エストニア語-ドイツ語辞典』(*Ehstnisch-deutsches Wörterbuch*, 1869) と『エストニア語文法』(*Grammatik der ehstnischen Sprache*, 1875) を著した．1884 年には，エストニア語で書かれた最初のエストニア語文法 (K. A. Hermann, *Eesti keele Grammatik*) が出されている．

高等教育を含めた社会のあらゆる領域で機能している言語を「文化言語」とよぶとすれば，エストニア語が，文化言語としての地位を確立するのに決定的な意味をもったのは，1918 年 (ソビエト・ロシアによる独立承認は 1920 年) に，エストニアが国家として独立し，エストニア語を公用語と定めたことである．エストニア語を，文化言語にしようとする言語改革の関心は，1910 年ごろから，正書法の確立を含めた語形変化(屈折)の標準化と，文化語彙を豊かにすることに集中していた．改革に中心的役割を果たしたアービック (Johannes Aavik, 1880～1973) とベスキ (Johannes Voldemar Veski, 1873～1968) の間には，改革に対する考え方の点で対照的なところがあった．「言語改造 (keeleuuendus)」派とよばれたアービックが，現実に存在している言語体系に積極的に外から改変の手を加えることを主張したのに対し，「言語調整 (keelekorraldus)」派とよばれたベスキは，現実に存在する言語体系を内的に豊かにすることをめざしたからである．ベスキの立場は，1920 年に結成された「母語協会 (Akadeemiline Emakeele Selts)」の出す雑誌『エストニア語』(*Eesti Keel*, 1922～40) が代表し，『エストニア語正用法辞典』(*Eesti õigekeelsuse sõnaraamat*, 1925～37) の完成により，その優位は揺るぎないものとなった．しかし，アービックの提案した改革案のうちで，標準語に定着したものは数多くあり (名詞の複数の標識 -i-，単数入格の「短形」等々，語彙では，relv「武器」，veenma「説得する」等々)，「言語改造」の立場もしっかりと足跡を残している．また，言語改革と平行して，方言の体系的な調査が，サーレステ (Andrus Saareste, 1892～1964) を中心に行なわれ，方言地図も出版された．とくに方言語彙の収集は，標準語の語彙を豊かにする点で大きな意味をもった．

言語改革は，エストニアがソ連に併合(1940)された

後も続けられ，今日に至っているが，そのようすは，たとえば，1960年の正用法辞典（*Õigekeelsuse sõnaraamat*）と，その改訂版である1976年の正用法辞典（*Õigekeelsus-sõnaraamat*）とのタイトルの違い（1960年版では，õigekeelsuseという属格形が用いられ，全体が2語に綴られている）が象徴的に物語っている．辞書の編集に関しては，国語辞典（*Eesti kirjakeele sõnaraamat*）と方言辞典（*Eesti murrete sõnaraamat*）の出版の準備が進められている．本格的な方言辞典の出版に先だち，『方言小辞典』（*Väike murdesõrastik*）の出版が，1982年からはじまった．

エストニア語の文学も，言語改革と並行して，19世紀末から20世紀前半にかけての時期に，本格的な開花をみた．この時期に活躍した代表的な作家に，タンムサーレ(Anton Hansen Tammsaare, 1878～1940)やトゥクラス（Friedebert Tuglas, 1886～1971），詩人には，スイツ（Gustav Suits, 1883～1956）などがいる．ソビエト体制になってからも文学活動は盛んで，月刊の文芸雑誌として『言語と文学』（*Keel ja Kirjandus*），『創作』（*Looming*）の2つが出ている．

［語　彙］　エストニア語の語彙のうちで，フィン・ウゴル祖語（→『大辞典』ウラル語族）あるいはウラル祖語にまでその起源をたどることのできるものと，フィン祖語（→『大辞典』バルト・フィン諸語）にまで起源をたどることのできるものには，たとえば，それぞれ，表11と表12にあげたような語がある．

〈表 11〉　エストニア語の語彙
（フィン・ウゴル系，またはウラル系）

親族等に関するもの：
isa「父親」 ema「母親」 poeg, poiss「息子，少年」 neiu「乙女」 nimi「名前」

人体に関するもの：
pea「頭」 silm「目」 keel「舌，言語」 suu「口」 käsi「手」 jalg「足」
süda「心臓」 maks「肝臓」 luu「骨」 veri「血」

植物，動物に関するもの：
puu「木」 kuusk「モミ」 seen「キノコ」 kala「魚」 lind「鳥」 muna「タマゴ」
või「バター」

代名詞：
mina「わたし」 sina「あなた」 tema「彼，彼女，それ」 meie「わたしたち」
teie「あなたたち」 nemad「彼ら，それら」 see「これ，それ」 too「あれ」
need「これら，それら」 nood「あれら」 kes「誰」 mis「何」 muu「ほかの」

数　詞：
üks「1」 kaks「2」 kolm「3」 neli「4」 viis「5」 kuus「6」

自然に関するもの：
suvi「夏」 sügis「秋」 talv「冬」 kuu「月」 öö「夜」 jõgi「川」
maa「大地」 mets「森」 kivi「石」 ilm「空気」 vesi「水」 jää「氷」
lumi「雪」 tuli「火」

その他：
suusk「スキー」 uus「新しい」 ala-「下」 üla-「上」 esi, ede-「前」 taga-「後」

動　詞：
andma「与える」 elama「生きる」 jooma「飲む」 kuulma「聞く」 lugema「読む」
minema「行く」 nägema「見る」 olema「ある，いる」 panema「置く」
pelgama「恐れる」 pidama「手にもつ」 sööma「食べる」 tegema「作る」
tulema「来る」 tooma「もってくる」 ujuma「泳ぐ」 viima「もっていく」

〈表 12〉　エストニア語の語彙
（バルト・フィン系）

人体に関するもの：
huul「唇」 nina「鼻」 juuksed「髪」 rind「胸」 higi「汗」

動物・植物に関するもの：
hobune「馬」 karu「熊」 põder「オオシカ」 mänd「マツ」
vili「穀物，果実」 mahl「果汁」 rasv「脂肪」

自然，時間：
hõbe「銀」 mägi「山」 neem「岬」 saar「島」 soo「湿地，沼」 vihm「雨」
ida「東」 põhi「北」 aeg「時間」 päev「日中，1日」 eile「きのう」
homme「あす」

人間の活動：
sõna「ことば」 kiri「手紙」 häbi「恥」 ilu「美」 laul「歌」 õnn「幸福」
raha「貨幣」 nälg「空腹」

その他：
saun「サウナ」 sugu「一族」 talu「農場」 linn「都市」

形容詞：
kallis「大切な」 kõva「かたい」 lühike「短い」 must「黒い」 noor「若い」
paha paks peen pehme pikk

「悪い」「厚い」「細かい」「やわらかい」「長い」
püha selge suur sügav
「聖なる」「はっきりとした」「大きい」「深い」
tark terve tõsi täis õhuke
「賢い」「健康な」「真実の」「満ちた」「薄い」

動　詞：
jooksma kõndima lendama magama
「走る」「歩く」「飛ぶ」「寝る」
nutma otsima põgenema paluma
「泣く」「さがす」「逃げる」「頼む」
tahtma teadma uskuma võtma
「欲する」「知っている」「信じる」「手にとる」
väsima
「疲れる」

借用語は，借用の時代，借用先の言語によって，いくつかのグループに分けることができる．もっとも古いものは，すでにフィン・ウゴル祖語の時代（紀元前4000年ごろまで）に印欧語（主としてインド・イラン語派）から借用されたと考えられている語である．次に古い借用語のグループは，前期フィン祖語時代（紀元前1500～1000年ごろ）にバルト諸語から借用されたとされているものである．また，後期フィン祖語の時代（紀元前1000～紀元0年ごろ）には多数の語彙がゲルマン語から借用されたと考えられている．それ以後も，スラブ語(主としてロシア語)，スウェーデン語，ドイツ語，フィンランド語などから，たくさんの語彙がエストニア語に借用されている(表13参照).

〈表 13〉 エストニア語の語彙の中の借用語

印欧語(インド・イラン語派)から(フィン・ウゴル祖語時代)：
põrsas sada sarv vasar
「豚」「100」「(動物の)角」「槌」
バルト諸語から(前期フィン祖語時代)：
hammas hein hernes hirv lõhi
「歯」「干草」「エンドウ豆」「シカ」「サケ」
meri sein sild tuhat tütar vill
「海」「壁」「橋」「1000」「娘」「羊毛」
ゲルマン語から(後期フィン祖語時代)：
ja juust kaunis kaup
「と(接続詞)」「チーズ」「美しい」「商品」
kell kuld kuningas lammas leib
「鐘，時計」「金」「王」「羊」「パン」
nael nõel põld raud rõngas rikas
「クギ」「針」「畑」「鉄」「輪」「富裕な」
rukis sama tuba
「ライ麦」「同じ」「部屋」
スラブ語から（ロシア語からの比較的新しい借用語も含む)：
aken jaam lusikas nädal raamat
「窓」「駅」「スプーン」「週」「本」
rist turg vaba värav kass
「十字」「市場」「自由な」「門」「猫」
kõrts tatar tõlk tubli
「酒場」「ソバ」「通訳」「よい」
スウェーデン語から：
paat pagar säng tasku
「ボート」「パン屋」「ベッド」「ポケット」
ドイツ語から：
arst hunt jah kaal
「医者」「オオカミ」「はい，ええ」「重さ」
kaart kartul kinkima klaas
「カード」「ジャガイモ」「贈る」「ガラス」
kleit kool korter kunst köök
「ドレス」「学校」「アパート」「芸術」「台所」
lihtne loss märkama naaber paar
「単純な」「城」「気づく」「隣人」「対」
peegel piibel pilt pliiats pood reede
「鏡」「聖書」「絵」「鉛筆」「商店」「金曜日」
reisima riik rääkima selts
「旅行する」「国家」「話す」「協会，団体」
suhkur tass teenima tudeng tool
「砂糖」「茶わん」「勤める」「学生」「イス」
trükkima tükk vein viis vorm
「印刷する」「…個」「ワイン」「様式」「形」
värske värv õli
「新鮮な」「色」「オイル」
フィンランド語から：
aine ala ese huvi mainima
「物質」「領域」「物体」「興味」「言及する」
mugav saabuma suhe suund
「快適な」「到着する」「関係」「方向」
säilitama tavaline tehas
「保存する」「普通の」「工場」

エストニア語の語彙に関して注目しなければならないのは，20世紀に入ってから人工的につくられた語がかなり存在することである．たとえば，

heli「音声」，ravi「治療」，relv「武器」，siiras「率直な」，veerg「(新聞などの）コラム」，kehtima「有効である」，meenuma「思い出す」，sõltuma「依存する」

などのように，すっかり定着しているものが，かなりみられる．人工的に語をつくるという方法は，語彙を豊かにする手段のひとつとして，エストニアの国語学者の間で積極的に評価されており，人工語は，現在でも盛んにつくり出されている．たとえば，eirama「無視する」，olbama「注視する」，raal「計算機」，sudu「スモッグ」，teler「テレビ」などのような語が，比較的新しい人工語として新語辞典に登録されている．

[辞　書]　エストニア語には，まだ「国語辞典」に相当する辞書がなく，エストニア語の語彙の標準化は，「正用法辞典」とよばれる1種の正書法辞典によって行なわれてきた．もっとも新しい正用法辞典は，1976年に出された（*Õigekeelsussõnaraamat*, Valgus, Tallinn, 896p.）．1984年までに4回版を重ねている．この辞書は，それぞれの語の正書法と活用のタ

イプを示すほか，特殊な語には使用分野(古語，方言，専門用語等)を指示し，必要な場合には，簡単に語義も添えているもので，見出し語は10万語を超えている．

エストニア語と他の外国語との辞書は，一般に外国語を学ぶエストニア人のためにつくられているために，エストニア語の名詞や動詞の活用に関する情報などが欠けていて，一般に外国人が使いこなすのはむずかしい．外国人を対象としている辞書には，Paul F. Saagpakk (1982), *Estonian-English Dictionary* (Yale University Press, cxi+1180 p.)と，P. Kokla et al. (1971), *Virolais-suomalainen sanakirja* (『エストニア語－フィンランド語辞典』Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki, xii+518 p.) がある．前者は，見出し語数が約7万語，かなり詳しい文法解説がついている．ただし，西側で出されたものなので，エストニア本国における規範に従っていないところがあるほか，活用のタイプの分類が，正用法辞典の分類に準拠していないという難点がある．後者は，エストニア本国で出た学習辞書のフィンランド版で，エストニア語を学ぶフィンランド人を対象とした辞書である．正用法辞典に準拠しているが，動詞の見出し語形として，フィンランド人に便利な「da 不定詞」形を用いている点で，他の辞書がすべて「ma 不定詞」形を用いているのと対照的である．

外国語を学習するエストニア人向けの辞書のうち，比較的最近出された主なものは，次のとおりである．

J. Silvet (1980), *Eesti-inglise sõnaraamat* (『エストニア語－英語辞典』Valgus, Tallinn, 第2版, 509p.)

J. Tamm (1977), *Eesti-vene sõnaraamat* (『エストニア語－ロシア語辞典』Valgus, Tallinn, 第4版, 578p.)

K. Kann et al. (1964), *Eesti-saksa sõnaraamat* (『エストニア語－ドイツ語辞典』Valgus, Tallinn, 984p.)

K. Kann and N. Kaplinski (1979), *Eesti-prantsuse sõnaraamat* (『エストニア語－フランス語辞典』Valgus, Tallinn, 603p.)

このほか，特殊な辞典として，*Rückläufiges estnisches Wörterbuch* (『エストニア語逆引き辞典』Universität Bayreuth, 1979, lviii + 635p.) と R. Kleis et al. (1978), *Võõrsõnade leksikon* (『外来語辞典』Valgus, Tallinn, 第2版, 664p.) がある．

[参考文献]

Ariste, Paul (1977⁴), *Eesti keele foneetika* I, II (Tartu Riiklik Ülikool, Tartu)

Hint, Mati (1973), *Eesti keele sõnafonoloogia* I (Eesti NSV Teaduste Akadeemia, Tallinn)

Jänes, Henno (1972), *Grammatik der estnischen Sprache* (Liber, Malmö)

Kask, Arnold (1984), *Eesti murded ja kirjakeel* (Valgus, Tallinn)

Kurman, George (1968), *The Development of Written Estonian* (Indiana University, Bloomington)

Lavotha, Ödön (1973), *Kurzgefaßte estnische Grammatik* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

Mägiste, Julius (1970), *Vanhan kirjaviron kysymyksiä* (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki)

Mihkla, Karl and Aavo Valmis (1979), *Eesti keele süntaks kõrgkoolidele* (Valgus, Tallinn)

Raag, Raimo (1981), *Estnisk fonetik* (Uppsala universitet, Uppsala)

Raun, Alo and Andrus Saareste (1965), *Introduction to Estonian Linguistics* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

Remes, Hannu (1983), *Viron kielioppi* (Werner Söderström, Helsinki)

Tauli, Valter (1973, 1983), *Standard Estonian Grammar* I, II (Uppsala University, Uppsala)

Valgma, Johannes and Nikolai Remmel (1970²), *Eesti keele grammatika* (Valgus, Tallinn)

Valmet, Aino, Uuspõld, Ellen and Ellen Turu (1981), *Учебник эстонского языка／Eesti keele õpik* (Valgus, Tallinn)

(松村　一登)